札幌市教育文化会館情報誌「楽」

vol.52

OCTOBER 2020

楽

sapporo education and culture hall news

Raku

［特集］

安心して楽しめる、開かれた「和の空間」

［特集］

安心して楽しめる、開かれた「和の空間」

新型コロナウイルスの影響が今後も続くと予想される中、地域に根ざした公共の文化施設として、安全対策に気を配りながら今年度のテーマ「もっとつながる　もっとひろがる　和の心」を形にすべく、新しい試みに挑戦しました。「閉塞感を少しでも払拭できるひとときを提供したい」という願いを込めた取り組みについて、ご紹介します。

札幌市教育文化会館では、能楽、文楽、歌舞伎といった伝統芸能の普及・振興のため、公演やワークショップなどさまざまな事業を展開しています。今年も例年同様に実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、主催事業などの中止が相次ぎました。そんな中、少しでも皆様に楽しんでもらえる空間づくりを目指し、開館後初となる取り組みとして実施したのが、1階ロビーに掲出した能面とフラワーアートのコラボレーションによる巨大ビジュアルです。吹き抜けの広い空間に強いインパクトと存在感を与えるこれら3作品は、能面作家・外沢照章さんとフラワーアーティストYANASEさんによって、情報誌「act」32・33合併号のために制作されました。「心・美・神」というテーマで選ばれた能面と、その使用演目からイメージした花の競演によって能の世界観を表現しており、「act」発行と同時に話題となった作品です。その他にも、切り絵作家・最上怜香さんと書家・若山象風さんによる「和文化プロジェクト」のロゴ作品も掲出しています。「和文化プロジェクト」は和文化の魅力を包括的に発信し、伝統芸能公演の鑑賞に付加価値を生み出すことを目指し、和服で観劇してくださった方などを対象に和小物をプレゼントする企画や、ホワイエ（ロビー）を和の雰囲気に誂えるなど、スタッフが一丸となってさまざまな取り組みを行っています。今回の取り組みも、「和文化プロジェクト」の一環として実施しました。

ポスターエリアには2種類のデザインが並びます。一つは、当館が建設される以前の、周辺地域の歴史を紐解くパネル展示。もう一つは、2020年度の取り組みにおけるキーワード「もっとつながる　もっとひろがる　和の心」を表現した一筆書き風のイラストです。

新型コロナウイルスによって、人々の意識も大きく変わりつつあります。地域に根ざした公共の文化施設として、安全対策に気を配りながら、「もっとつながる　もっとひろがる　和の心」を具現化していくためにはどうしたら良いのか。その一つの答えが、オープンスペースを活用した今回の取り組みです。例年、当館を訪れてくれる多くの施設利用者や観客の皆様に加えて、当館を普段訪れることのない方々にも楽しんでもらえることを目指し、いつでも誰でも訪れることのできる「和の空間」の創出に挑戦しました。新型コロナウイルスの影響による閉塞感を少しでも払拭できるひとときを、この空間で楽しんでいただきたいという願いを込めた取り組みです。

「人と芸術と社会をつなぐ」教文の試みピックアップ

コロナ禍においても「安全に芸術とつながる機会と、より充実した観劇体験を創出する」ことを目指し、実施した取り組みをご紹介。

オリジナル羽織

和文化プロジェクトの一環として、2018年の「能楽なう」で職員が和装でお客様をお迎えした試みが好評だったことから、伝統芸能公演時に職員が着用する衣裳として、カジュアルに和装の雰囲気を楽しめるオリジナル羽織を製作。「act」35号で紹介した衣裳のアキヨさんと協働でデザインしたもので、10月の文楽公演でお披露目されました。鮮やかな青と黒が目を引きつつ、全員が着用することでより統一感のある和の雰囲気を演出しています。

教文たまてばこ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、長期間に渡って芸術を楽しんでいただく機会の提供が困難な状況の中、舞台芸術を自宅で楽しんでもらおうとイベント『教文たまてばこ』を開催。ダンス・オンライントークを皮切りに、「夏休み子ども体験新喜劇」の講師を務める砂川一茂先生からのメッセージや、おうちで漫才を楽しむための台本提供、ぬりえで楽しむ能楽など、教文スタッフが工夫を凝らし、新たなエンターテインメントとしてお届けしました。

ニューノーマル下でのおもてなし

10月5日の人形浄瑠璃文楽公演では、安心して公演をお楽しみいただけるよう、新型コロナウイルスの感染予防対策を講じてお客様をお迎えしました。皆様には来場前の体調チェック、マスクの着用や手指の消毒、非接触型体温計による検温などへのご協力をお願いしました。また、当館側の対策として入場者数をホール収容定員数の半分以下とし、換気をまめに行った他、ホワイエカウンターでは飛沫感染防止用のビニールシート等を設置、終演後の分散退場などを実施しました。

札幌市教育文化会館
開館から現在までの変遷

幅広い分野の事業を行っていた歴史が現在の礎に。

札幌市の教育文化活動の拠点、生涯教育の場として1977年にオープンした札幌市教育文化会館は、開館～1999年3月までの（財）札幌市教育文化財団時代と、1999年4月に（財）札幌芸術の森と統合し（財）札幌市芸術文化財団となってからの時代に大別することができます。芸術の森やコンサートホールKitaraもまだない時代、札幌市視聴覚センター（※）を管轄施設として有する教育施設として、また芸術文化の中核施設としてオープンした当館は、市民の皆様からも高い期待を寄せられました。85年の情報誌を見ると、当館が舞台芸術発表、研修・学習、音楽、舞踊の練習の場として、年間約80％という高利用率のもと約50万人に利用されていることがわかります。

開館当初から舞踊、演劇、伝統芸能、音楽、映画、学習型事業という幅広い分野の事業展開を行っていた歴史が、当館事業の礎となっています。現在は幅の広さを残しつつ、これまでの実績をもとに焦点を絞って深く追求する設計へと移行。和文化プロジェクト、ホワイエ（ロビー）や札幌文化芸術交流センターSCARTSでの能楽展示、演劇フェスティバルなど、地元のアーティストやクリエイターとのコラボレーションによる創造的な事業へと発展したものもあります。今後も歴史とともに新しい姿へと成長し続けることを目標に、10年後、20年後を見据えた事業展開をしていきたいと考えています。

※1999年に運営管理を（財）札幌市生涯学習振興財団に移管。

KYOBUN HISTORY
1977-2020

1 ［開館当初］ 1977-1979
札幌市の教育文化活動の拠点として

1977年、札幌市の学校教育並びに芸術文化活動の中枢的拠点、生涯教育の場として開館。札幌市芸術文化財団の設立前で札幌市教育文化財団が市から委託を受けて管理。開館1周年記念行事では著名な評論家、作家、新劇俳優を招いての講演会、落語や子ども音楽会、映画会を実施し約3,000名が参加。設立の趣旨に向けて試行錯誤しながら事業を積み重ねた時期でした。

2 ［開館10年］ 1980-1987
三つの視点からの自主事業

教職員を対象とした研修や、小・中・高校の舞台活動に対する会場提供など「学校教育」、小・中学校やPTAの文化事業、市民の教養のための各種講座など「社会教育」、創造と交流、鑑賞を柱とした「芸術文化」という三つの視点から自主事業を実施。「夏と冬に文化の季節を」と事業のシリーズ・シーズン化も始まりました。

3 ［開館20年］ 1988-1997
幅広い分野の充実した事業展開

映画シリーズやソプラノコンサートなど、現在では行われていない事業が開催。教育事業も広く普及し、中・高校の演劇部員にとっては年に一度の発表大会を行うホームグラウンドに。97年には札幌で初の試みとして、札幌市内の中学校と石狩地区の高校の代表校が一同に発表しあう「中文連・高文連演劇フェスティバル」が開催されました。

4 ［開館30年］ 1998-2007
札幌市芸術文化財団設立

1999年に（財）札幌市教育文化財団が（財）札幌芸術の森と統合し、「財団法人札幌市芸術文化財団」へ。（現在の指定管理者制度の導入により、指定管理者1期が開始。）同年に札幌市視聴覚センターの運営管理を（財）札幌市生涯学習振興財団に移管しました。記念事業では札幌薪能の開催に合わせ、ギャラリーで能楽展も開催しました。

5 ［開館40年］ 2008-2017
教育の時代から、普及・振興へ

近年の劇場法の制定や、文化庁が掲げる「あらゆる人々が文化芸術に参加・鑑賞・体験できる場の創出」という方針のように、時代は「教育としての文化芸術」から「普及・振興の文化芸術」へ。当館でも誰もが参加できるコミュニティダンス事業のほか、市民はもちろん観光客や外国人来札者など幅広い層へリーチできるような事業展開を実施しています。

Sapporo education and culture hall

1977

昭和52（1977）年7月15日 開館記念式典開催

詩の朗読に始まった式典は、國松登さんの原画によるつづれ織の緞帳「北国」の披露、北大・大谷短大混声合唱と琴による演奏等で盛り上がりました。

開館記念公演 人形浄瑠璃文楽

開館記念行事の最後を飾った文楽公演では、二人三番叟、平家女護島、新版歌祭文が上演。市民ロビーでは文楽人形展も開催され、文楽人形やかしらなど120点が展示されました。

1987

10周年記念特別公演 札幌薪能

札幌では81年に北海道神宮で開催されて以来となる薪能の上演は、前年にオープンしたばかりの札幌芸術の森を舞台に当代一流の豪華メンバーが出演。来場者も全道各地から参集し、大きな話題を呼びました。

新春雪のおどり

開館翌年に企画が決まった、当館初となる創作作品。現在は行なっていない日本舞踊による創造型事業で、79年の初お披露目以降、継続して取り組んでいたことが伺われます。

教文ニュース
1987.4

AVC情報
創刊号 1977.7

1997

20周年記念事業 キャスリーン・バトル・ソプラノコンサート

世界中の聴衆を魅了するキャスリーン・バトルの全国7都市9公演ツアーの最終公演を5月に開催。同年7月には札幌コンサートホールKitaraが開館。

教文演劇セミナー 8期生＆卒業生合同 「私たちの青い鳥」公演

85年に開設された演劇セミナーは、2年間の研修を実施する内容で継続。ミュージカル仕立ての合同公演を行いました。

情報誌
「楽」
創刊準備号 2007.6

2007

30周年記念事業 Noism07 W-view 新作ダンス公演

2005年以来2回目となるダンス・カンパニー「Noism」の公演を開催。Noismは現在も札幌市民交流プラザで上演するなど、当財団との関係が続いています。

30周年記念事業 「映画～歌舞伎役者・片岡仁左衛門～全6部作上映会」

歌舞伎界の最長老、13代目片岡仁左衛門の記録映画の上映会。99年に移管した視聴覚センターによる映像鑑賞事業の名残が感じられるプログラムです。

情報誌
「らく」
2017.3

2017

40周年まつり 「ママと子どものはじめての音楽会」

札幌オペラシンガーズによるコンサート。乳幼児を含む家族向けの取り組みも、試行錯誤を重ねて人気のシリーズへと成長。地元の実演家を起用して自主制作する事業展開も近年の傾向です。

■教文情報誌Webアーカイブ

act
www.kyobun.org/
スマホからはこちら

情報誌
「act」
2019.12

情報誌
「楽」
2018.7

情報誌の変遷

開館当時、札幌市視聴覚センターが独自に発行していた情報誌「AVC情報」は、当館が発行する「会館だより」と合わせて、開館当時を知る貴重な資料です。78年には両誌が統合し、「教育文化会館ニュース」となりました。その後、2007年から現在の「楽」となり、2010年からは「act」も発行しています。「楽」や「act」は単なるフリーペーパーとしてではなく、「情報資産」として捉え制作しており、ホームページで公開しています。

Japan Culture Tour

教文和文化巡り

第5回 YANASE design. MARUYAMA

伝統芸能とともに日本の文化の魅力を気軽に体感してもらう「和文化プロジェクト」。
連載5回目は、YANASE design. MARUYAMAをご紹介します。

YANASE design.
MARUYAMA

札幌市中央区南5条西25丁目1-8
STUDIO Cinq 1階
tel.011-522-9681
営業時間／10:00〜18:00
月曜・第三火曜日定休
https://www.yanasedesign.com/

独創的なイメージを創り出す花の専門店

教文の情報誌「ａｃｔ」で、能面との見事なコラボレーションを披露してくれたフラワーアーティストのＹＡＮＡＳＥさん。「想像を超え、無形の美を追求する」をコンセプトに生まれる花束やアレンジメント、ウェディングブーケ、店舗活けこみ等はファンが多数。インテリアとして存在感を放つ、ドライ植物のフォルムを生かした彫刻的なオブジェも手がけます。贈りものとしてはもちろん、自宅用としてもオススメしたいのが、ＷＥＢショップから注文できる「シュエットヌーベル」など花器に合わせて季節の花束を定期的に届けてくれるサービス。花は一輪飾るだけでも空間を豊かにしますが、花と花の掛け合わせによる美しさを楽しめるのは花束ならでは。「花と一緒にご自宅での時間を過ごし、癒されてほしい」という思いのもとスタートし、新型コロナウイルス感染拡大防止の外出自粛期間をきっかけに、多くの方が利用している人気サービスです。今年夏には初の個展も開催。ドレスと花にプロジェクションマッピングを施した作品を中心とする展示が、話題を呼びました。伝統芸能を含め、さまざまなジャンルとのコラボレーションによって新しい花のイメージを見せてくれるＹＡＮＡＳＥさんと、そのショップに注目です。

SAPPORO ENGEKI no WA

深浦 佑太さんから指名

演劇のわ

さっぽろ

[プロフィール]
村上 義典
Yoshinori Murakami

1987年深川市で生まれる。小学校の先生に誘われたことをきっかけに演劇を始め、市民劇団等で舞台に立つ。大学では北海学園大学演劇研究会に所属しながらも様々な劇団に客演。卒業後はフリーで活動を行う。2018年TGRにて俳優賞を受賞。2020年よりディリバレー・ダイバーズに所属。

ディリバレー・ダイバーズ

村上 義典

「自分の演劇に意味があった」と、
少しだけ前向きな感情が戻ってきました。

［撮影協力］
珈琲プラザ コージーコーナー
札幌市中央区北4条西4-1-2 札幌国際ビル B2F

ＴＧＲ札幌劇場祭２０１８で出演作『ＴＥＡ ＦＯＲ ＴＷＯ〜二人でお茶を』が大賞、自身も俳優賞を受賞した村上義典さん。着実にキャリアを重ねてきた彼の現在地とは？

――演劇を始めたきっかけは？

小学５年生のときに地元深川の市民劇団に入ったことがきっかけです。大学で札幌に出てきて、自分の知っている演劇と札幌の演劇が全く別物だと気付かされました。札幌で初めて出た作品の稽古で悔しすぎて１回泣いて、ある意味そこから怖いもの知らずになったのですが（笑）。それ以降も自分の演技が通用しない場面は結構あって、その都度発見があって楽しかったです。

――就職した銀行を２年ほどで辞めて、役者修行で東京に出たそうですね。

弦巻楽団『ラブレス』で共演した小林エレキさんと深浦佑太君が抜群に面白くて。演劇だけでやっていくことを選択した二人を見て、自分も仕事を辞めて東京の養成所で２年ほど過ごしたのですが、そこで関わった芝居が自分のやりたい芝居とは違って。それなら二人の芝居を間近で見ていた方がいいなと思って、札幌に帰って今に至ります。

――最近ぶち当たった壁はどんなものですか？

ある作品で登場時間の短い役を複数演じたときに、演技が行き詰まってしまったことがありました。深浦君に相談したら演技の本を紹介してくれて、その本を読んでアプローチを稽古場で常に模索していけるようになり、ＴＧＲで俳優賞をもらいました。演技の仕方を変えて、すぐに成果として現れたことは嬉しかったです。

――コロナウイルスの感染拡大が起こり始めた２月末以降、多くの公演が中止となりました。その時期、一人の演劇人としてどんなことを考えましたか？

10年ほど前に一度病気のため降板したことがあって、それ以来絶対降板はしないというルールを課してきました。なのに、８月に公演予定だった弦巻楽団『果実』を降板してしまった。思い入れのある作品ですごく悩んだのですが、３歳の息子への万が一の感染リスクを考えると、どうしてもそのまま進めなくて。大事にしていたルールを破った以上、今後も演劇を続けていけるのか自問し続けた時間でした。

――そんな中『ＴＥＡ ＦＯＲ ＴＷＯ』が配信されました。

観た人がツイッターに書いてくれた感想を読んで、すごく感動しました。『果実』を降板してから全然前向きな気持ちになれなかったけど、「自分の演劇に意味があった」と少しだけ前向きな感情が戻ってきて。まだ現状だと自分としては演技を自粛せざるを得ないけれど、取り組んでいきたい演技の課題もあるので、やっぱり芝居をやりたいと思ってしまいますね。